学校教育目標	○よく考え やりぬく子ども(重点目標) ○やさしく 思いやりのある子ども ○明るく 元気な子ども	育成を目指す資質・能力及び特色ある教育活動	【特色ある教育活動】 重点1基礎的・基本的な知識・技能の定着を図りながら「協働問題解決能力」を中心に学力の向上を図る。 重点2他者と共生できる豊かな人間性を育む。 重点3「協働問題解決能力」を育む学校支援本部の活動を保障し、地域に開かれた学校づくりを推進する。
目指す学校像(ビジョン)	【目指す学校像】学が楽しさのある学校 信頼でき、協働したくなる学校 働く喜びのもてる学校 【目指す児童・生徒像】「他者と協働して主体的に問題を解決しようとする子ども」 【目指す教師像】 ◎共に学び合い、協働し合う教師 ◎共に学び合う教師 ◎共に学び合う教師	【育成を目指す資質・能力】 「協働問題解決能力」 ○基礎的な力(言語、数量、情報スキル) ○他者と共に考える力(協働問題解決力、メタ認知) ○他者と共生できる力(人間関係形成力) ○社会の中で実践する力(社会参画力、自律的活動力)	

前年度までの学校経営上の成果と課題
 ・「誰にでも分かる授業づくり」の視点で三小スタンダードをもとに指導や教室環境の整備を継続することができた。協働問題解決能力の向上の土台となるように、校内研究では算数の「数と計算」についての個別最適な学習の研究を行う。体験学習など学校支援本部の支援による教育活動もさらに充実してきたが、課題としては、学習の土台となる基礎的・基本的な知識・技能の定着を進めることである。分かる授業つくりとともに、全校的な取組としての学び直しも実施し、学力の底上げを目指す。また、学校支援本部をはじめとする保護者・地域や専門家の方々との連携し体験活動を積み重ねさせる中で、教育活動全体を通して基礎的なスキル、思考力・判断力・表現力、人間関係形成力、社会的実践力などの力を意図的・計画的に育むことに取り組む。また、今年度は児童の災害時対応の意識を高める活動を計画する。

柱	具体的方策	自己評価		学校関係者評価	次年度以降の改善方策
		評価	課題及び次年度以降の改善方策(案)	学校関係者による「自己評価」についての評価	学校関係者評価の結果を踏まえた改善方策
確かな学力の向上	児童の実態に応じて「三小スタンダード(学習)」を活用し、学習活動についての効果を検証し、実践に生かす。	4	3	・個別指導の機会を大切にして、視覚化の工夫をさらに行っていくとよい。 ・「三小スタンダード」の目標を明確化するとよい。 ・児童個々の学習に対するモチベーションを注目するとよい。	・今年度の研究での個別指導での成果を生かし、取組を継続する。 ・「三小スタンダード」の目標を項目ごとに具体化させ、効果を検証できるようにする。 ・学習ごとの児童のモチベーションを見取り、指導に生かせるようにする。
	校内研究での取組や算数パワーアップの時間に学び直しを行い、定期的に効果を検証する。	4	3	・組織的に取り組み、効果測定評価を行うのはとても良い。 ・先生方の努力によって、児童が学びを受け入れ、力をつけている。	・今年度の研究の計算力向上の取組を継続するだけでなく、来年度の研究の問題解決能力向上での組織的な取組と効果検証を推進する。 ・放課後の補習やテストの結果からの検証、改善を継続する。
豊かな心の育成	「挨拶と返事」が大切にできるような学年・学級で取り組む。相手を「くん・さん」づけで呼び、温かい言葉がけをする。	4	3	・授業中とそれ以外の差はあってもよいが、いじめにつながるような言動は防ぎたい。 ・挨拶は言葉がよく出ている。 ・丁寧な言葉遣いをする中でどんなメリットがあるか、児童に考えさせ、自分の言葉で説明できることが大切である。	・児童の言動に気を付け、見守りを継続する。 ・挨拶の取組を継続し、温かい関係づくりを大切にする。 ・言葉遣いとコミュニケーションについて考える学習を計画する。
	いじめ未然防止の取組を毎学期行う。(3年生以上は年2回のアセスを実施し、検証する)	4	4	・いじめ未然防止のためにアンケートを実施し、小さな情報も逃さず聞き取りをした。 ・アンケートには表れにくいこともあるという危機意識をもち、児童に声掛けをしたり、様子を見たりしていく意識を継続する。	・ふれ合いアンケートだけでなく、毎週の校内委員会での情報確認も継続し、児童からの聞き取りや様子の見守りを大切にしていく。 ・学級指導や学級活動を活用し、いじめが起きない環境づくりについて話し合い、考える活動を計画する。
健やかな体の育成	体育集会・外遊びの充実と体育の授業における児童の意欲を喚起する教材や指導法を工夫する。	4	3	・体育集会では、旬間について一人一人がめあてをもって取り組めるように学級で指導した。また、旬間の内容を授業でも扱うようにして、意欲的に取り組めるように指導したが、技能の伸びには課題がある。 ・体育の授業では、一人一人が目標をもち、それを楽しんで達成できるように学習カード、場の工夫、BGM等の工夫をすることができた。	・児童の意欲を高めるような指導を継続してほしい。 ・技能を高めるための指導法を工夫する必要がある。
	生活リズム点検、メディアコントロール点検の結果等を使って、児童と保護者に対して生活習慣への啓発を行う。	4	3	・生活リズム点検表を長期休業明けに実施したが、長期休業に限らず、生活リズムが整わない家庭がある。また、メディアに関する項目を設け、実態についての考察内容を保健だよりで啓発することができた。メディアに関するアンケートも1月末に全校で実施し、児童の意識を高める。	・家庭への働きかけを工夫、継続する必要がある。 ・メディアコントロールが一番難しい。日常的な取組を考えた視点も持つべきである。
特別支援教育の充実	校内委員会での情報を基に「三小スタンダード」を生かした学習の流れの見直し、分かりやすい板書、発問の精選、振り返りを行い、分かりやすい授業を展開する。	4	3	・「三小スタンダード」を活用し、見直しをもてる授業を意識して実施した。その流れが視覚的に分かるような板書も心がけた。 ・校内委員会での情報を基に、対象児童の実態に合わせた発問や課題、指導法も工夫することができた。効果的な場面もあったが、難しい場面もあったので、指導の工夫を継続する。	・工夫した授業の実践が進んでいる。 ・「三小スタンダード」を基本に、さらなる指導法の工夫を考え、形骸化しないようにしたい。
	毎月取組を行い、連絡帳、学年だより、学校だより、HPで情報発信を行う。理解啓発授業は全学年で行う(年1回以上)。	4	4	・全クラスでのさりの理解啓発授業やそよぎの交流学習、紹介指導等を実施し、情報発信もすることができた。 ・特別支援に対する理解が深まった面があり効果的だったが、機会の確保のための時間が不足している。学習指導計画の見直しが必要である。	・限られた時間の中で、効果的に実施できた。 ・さりの理解が深まっていると思うが、アンケートに反映されていない面がある。
本校の特色	異学年交流を図ると共に、学年ごとに地域人材や保護者等との参画型授業・出前授業等を計画的に工夫して行う。	4	3	・様々な場面でコミュニケーションが進んだ。これからも異学年のブロックごとに活動したりすることができた。 ・清瀬の自然を守る会や図書館、清瀬特別支援学校、ウイズアイ等、多くのゲストティーチャーの方にお世話になり、よりねらいに迫る活動を取り入れることができた。	・たてわり班や運動会での取組の継続だけでなく、特別活動領域での異学年交流の機会を設定していく。 ・学習のねらいを明確にして、計画的に参画型授業や出前授業を企画し、前後の学習活動に生かせるようにする。
	学校だより、学年だより、保健だより、給食だよりの他、学校ホームページ、メール配信等で情報を発信する。	4	4	・学校、学年だより、ホームページ等を通して、学習や生活の様子を発信することができた。 ・ホームページやH&Sのアプリ等の情報発信機会は増えていくが、重要なものが分かりにくくならないよう、発信内容については検討する必要がある。	・ホームページとH&Sの活用を推進していくとともに、発信内容や頻度、配布方法も検討していく。保護者からの意見を聞き取り、改善を推進する。